お茶の水女子大学における留学生と日本人学生のための国際教育交流シンポジウムの実践

The International Education and Exchange Symposium for International and Japanese Students

お茶の水女子大学グローバルリーダーシップ研究所特任講師　**小松　翠**

KOMATSU Midori

(Institute for Global Leadership, Ochanomizu University)

キーワード：異文化間交流、留学生、日本人学生、多文化共生社会

0.　はじめに

国際教育交流シンポジウムはお茶の水女子大学のグローバル教育センター主催のシンポジウムであり、同大学の加賀美常美代教授が13年間実践してきたシンポジウムである（加賀美，2006、加賀美・小松，2013ほか）。国際教育交流シンポジウムは2002年に留学生センター（現グローバル教育センター）の企画として授業や講座のような時間的制約のない正課外の共同生活での交流活動を通じ、留学生と日本人学生の交流を深める機会を提供することを目指し開催された。2002年度から2014年度までに年1回、1泊2日の合宿形式で開催され、全13回の国際教育交流シンポジウムにおいて留学生は201名（26か国）、日本人学生175名、合計376名の学生[1]が参加してきた。国際教育交流シンポジウムに関する先行研究としては、加賀美（2006）では、国際教育交流シンポジウムに参加した日本人学生・留学生双方の創造性、共感性、協働性、相手文化尊重、寛容性、多文化尊重、曖昧性への忍耐の態度が意識化され、多文化理解の認識が深まっていることが示されている。さらに、小松（2015a）では、国際教育交流シンポジウムに参加した留学生と日本人学生の交流の過程には1）全体からグループ、個別の交流へと至る段階があること、2）両者が自発的コミュニティに参加する段階があり、3）この２つの段階を経ることで関係が深まること、4）国際教育交流シンポジウム3ヵ月後も交流を継続させていることが報告されている。これらの研究から、国際教育交流シンポジウムがお茶の水女子大学の留学生と日本人学生の交流促進の一翼を担ってきたと考えられる。そこで、本稿では大学キャンパスにおける多文化共生社会の実現に向けた取り組みとして国際教育交流シンポジウムの13年間の取り組みについて紹介する。

独立行政法人日本学生支援機構 Copyright © JASSO. All rights reserved.

１．国際教育交流シンポジウムと筆者の関わり

国際教育交流シンポジウムと筆者の関わりは、参加者としてサポーターとして研究者としての３つがあり、時を経て変化した。まず、2002 年度から 2007 年度まで（第 1 回、第 2 回、第 3 回、第 5 回、第 6 回）の計 5 回の国際教育交流シンポジウムにおける参加者としての関わりと、2013 年度国際教育交流シンポジウム（第 12 回）における院生サポーターとしての関わりがある。また、2002 年から 2005 年まで国際交流グループ TEA[2]に所属し（2003 年は副代表）、2003 年度国際教育交流シンポジウム（第 2 回）では実行委員長を務めた。

次に、研究者としての関わりについて述べる。筆者は卒業論文（石原, 2005）で、国際教育交流シンポジウムを含む国際交流グループ TEA の活動が異文化間の友人形成にどのような影響を与えるか、TEA のメンバーである留学生と日本人学生を対象に自由記述の調査を行い分析した（小松,2013）。また、小松（2015a）および博士論文（小松, 2015b）では、2012 年度国際教育交流シンポジウム（第 12 回）の参加者を対象とし、インタビュー調査を行い留学生と日本人学生の友人形成に至る交流体験と交流の継続について検討を行った。

以上のように、筆者は参加者・サポーター・研究者として国際教育交流シンポジウムに携わってきた。そこで、本稿では、2003 年から 2015 年までにお茶の水女子大学グローバル教育センター（旧留学生センター）が発行した「留学生と日本人学生のための国際教育交流シンポジウム報告書（第 1 回～第 13 回）」に記載された内容をもとに報告を行う。

２．国際教育交流シンポジウムの概要

年度ごとにスケジュールや活動は若干異なるが、大きく２つの交流企画から構成される。１つ目は全体活動で２つ目はグループ活動である。概ね 1 日目は大学からバスでの移動（昼食）、開会式、参加者全体での交流企画、会場施設見学、夕食をはさんだグループ討論会、自由行動、2 日目は、朝食、グループ討論の発表、昼食、閉会式、会場施設から大学までのバスでの移動という進行である。

３．国際教育交流シンポジウムにおける企画と活動の変化

３－１.企画内容の変化

参加者全体での交流企画については、年度により異なる企画が実施されてきた（表 1）。初期のシンポジウムでは、異文化間コミュニケーションに関する体験型学習が実施され、参加学生による自主企画を挟み、再び体験型コミュニケーション学習の企画に回帰し、その後 6 回にわたるシンポジウムにおいて緊張を和らげるアイスブレイキング機能を持つボディワークとゲームが行われ定着していった。

独立行政法人日本学生支援機構 Copyright © JASSO. All rights reserved.

表 1.国際教育交流シンポジウムの企画内容について

（2002 年度～2014 年度の国際教育交流シンポジウム報告書をもとに作成）

開催年度（開催回）	企画	コーディネーター	内容
2002年度・2003年度・2006年度（第1回・第2回・第5回）	異文化シミュレーションゲーム	学外講師	第1回・第2回では「肉体労働」、第5回では「バーンガ」が実施された。異文化シミュレーションゲームは異なる文化や価値観への気づきを促すためのゲームである（加賀美，2006a）。
2004年度・2005年度（第3回・第4回）	ビデオ上映と討論会	合宿実行委員（参加学生）	映画の上映と全体での意見交換が行われた。第3回では「セプテンバー11」、第4回では「千と千尋の神隠し」が上映され、グループ討論と参加者全体でのディスカッションの時間が持たれた。
2007年度・2008年度（第6回・第7回）	コミュニケーションゲーム	学内講師	第6回では加賀美教授の指導のもと、ペアになって無言のまま目隠しをした相手を案内する「非言語ゲーム」が行われた。第7回では「じゃんけんゲーム」および「みんなでコラージュ」が行われた。アイスブレーキングを目的とした「じゃんけんゲーム」は異文化間教育を専門とするアシスタントフェロー1名と院生サポーター2名によって行われ、共同作業を通してグループで作品をつくる「みんなでコラージュ」は加賀美教授の指導のもと行われた。
2009年度から2014年度（第8回から第13回）	ボディワークとゲーム	学外講師	学外講師の指導のもと、参加者がエクササイズに伴う言語的・非言語的コミュニケーションや共同作業を通して仲を深める、リラックスして、グループ討論に取組めるようにすることを目的として行われている。

なぜ、企画内容が変化しボディワークとゲームが定着化したのかということについては、開催初期の企画は、大学キャンパスでの異文化接触機会が少なかったため、異文化理解の学習や気づきに重点が置かれていたが、回を重ねるごとに参加者間の交流そのものに重点が置かれるようになっていったからだと考えられる。また、第 8 回以降では、シンポジウム開始時の全員で行なうボディワークとゲームは参加者間の緩やかなメンバーシップの形成を促す効果を持つため、その後、留学生と日本人学生との交流が全体から個へと進む導入部分としてスケジュールにおいて定式化されていったのだと考えられる。

さらに、2002 年度から 2012 年度（第 1 回から第 11 回）の夕食会場は施設内の食堂であったが、2013 年度・2014 年度（第 12 回・第 13 回）は、施設の野外会場で合宿実行委員のコーディネートでバーベキューが行われた。このことについても、上述のように交流中心のスタイルが重視されるようになり、自発的に異文化間交流の楽しさを追求することが合宿実行委員や参加者の学生の間で重視されるようになったことが背景にあると考えられる。

３－２．グループ討論のテーマの変化

テーマ別グループ討論は、全 13 回の国際教育交流シンポジウムにおいて開催されてきた企画である。テーマの選定とグループ編成は合宿実行委員によって行われ、参加者はグループメンバーとの顔合わせや資料収集などの事前準備を行った上で国際教育交流シンポジウムに参加している。

以下では、まず、第 1 回から第 13 回までの国際教育交流シンポジウム報告書（2002 年度から 2014 年度）に記載されたグループ討論のテーマを KJ 法（川喜田，1986）の手法を援用しカテゴリー編成し、

独立行政法人日本学生支援機構 Copyright © JASSO. All rights reserved.

分類した。その後、前期（2002 年度～2005 年度）、中期（2006 年度～2010 年度）、後期（2011 年度～2014 年度）に分け、大カテゴリーの件数よりテーマの変化について検討した。

全 13 回のグループ討論テーマは分析の結果、『文化』『対人関係』『社会問題』『教育』『観光』『異文化間心理』『大学生活』の 7 つのカテゴリーに分類された（図 1）。『文化』をテーマとしたグループは「大衆文化」「食文化」など、身近な話題である音楽や映画、食事に関して討論を行っている。『対人関係』をテーマとしたグループは「大学生の恋愛」など、恋人や友人、家族といった身近な他者との関係について討論している。『社会問題』をテーマとしたグループは「女性の就業とライフステージ」など、ワークライフバランスの問題や国際問題に関して討論を行っている。『教育』をテーマとしたグループは「大学の特色」など小学校・中学校・高校の特色や留学・教育システムについて討論している。『観光』をテーマとしたグループは「国際観光」など、グループメンバーが訪れた国内外の観光地に関して意見交換をしている。

図 1. 2002 年度から 2014 年度の国際教育交流シンポジウム
におけるグループ討論のテーマ（全 65 件）

『異文化間心理』をテーマとしたグループは「コミュニケーション」など言語・非言語のコミュニケーションスタイルや留学生と日本人学生の持つ対日イメージの比較に関して討論をしている。『大学生活』をテーマとしたグループは「大学生の日常生活」など日々の生活や進路に関して討論を行っている。以上のように、討論テーマは身近な話題から社会と関わる問題など多岐にわたっており、参加者の様々な関心に基づき選択されていた。

独立行政法人日本学生支援機構 Copyright © JASSO. All rights reserved.

次に、討論テーマについて前期（2002 年度～2005 年度）、中期（2006 年度～2010 年度）、後期（2011 年度～2014 年度）に分け、カテゴリーの件数を示した（表 2・表 3・表 4）。前期においては『対人関係』『社会問題』『文化』、中期では、『文化』『社会問題』、後期では『文化』『教育』のテーマが件数の多い順に上位 2 位を占めていた。このうち『文化』は、前期・中期・後期に共通して上位 2 位までに入っている。特に中期では、『文化』は全体の半数を占めており、参加者間で人気のあるテーマだといえる。これは、大衆文化や食文化などの身近なポップカルチャーに関する話題は、留学生と日本人学生の両者の自己開示がしやすい話題であることや、国際教育交流シンポジウムの参加者はそもそも異文化への関心が高いことが背景にあると考えられる。

表 2. 前期の討論テーマ
（2002 年度～2005 年度）

大カテゴリー	件数
対人関係	6件
社会問題	4件
文化	4件
大学生活	2件
観光	2件
異文化間心理	1件
総数	19件

表 3. 中期の討論テーマ
（2006 年度～2010 年度）

大カテゴリー	件数
文化	11件
社会問題	4件
大学生活	3件
異文化間心理	3件
対人関係	1件
総数	22件

表 4. 後期の討論テーマ
（2011 年度～2014 年度）

大カテゴリー	件数
文化	9件
教育	7件
観光	3件
対人関係	2件
社会問題	1件
異文化間心理	1件
総数	23件

また、前期において最も件数の多かった『対人関係』は中期ではわずか 1 件、後期では 2 件しかみられなかった。さらに、前期と中期では第 2 位であった『社会問題』が、後期では 1 件のみしかみられなかった。これは、国際教育交流シンポジウムに参加する留学生の多くは来日後 1 ヵ月半くらいの新入留学生であり、異文化環境における不安と緊張が高い状況であること、日本人学生の参加者も国際教育交流シンポジウムに初参加の学生が多く、同様に緊張した心理状態であることから、『対人関係』のように自身の価値観や信条など深いレベルの自己開示が必要とされるテーマが選択されにくいからだと考えられる。加えて、先述の参加者全体での企画の変化と同様に異文化理解の学習中心のスタイルから異文化間交流中心のスタイルへと国際教育交流シンポジウムで重視されるポイントが変化していったため、資料収集など事前学習が必要な『社会問題』のテーマは減少していったのだと考えられる。

後期のみにみられた大カテゴリーは『教育』である。前期・中期には『大学生活』のカテゴリーがみられたが、後期は『大学生活』がみられず、大学に限定されない義務教育過程や教育システムに関するテーマである『教育』そのもののテーマがみられた。これは、近年、グローバル人材育成が国家戦略とされている影響により、お茶の水女子大学においても日本人学生の留学経験者や留学希望者が増加しているため、日本人学生の関心も海外の教育制度や教育事情に向いてきたことが関連している

独立行政法人日本学生支援機構 Copyright © JASSO. All rights reserved.

と考えられる。以上のように、国際教育交流シンポジウムにおける企画や討論のテーマは少しずつ変化してきた。これは、交流支援者が、学生同士が相互に互恵的な関係構築ができるようにサポートしており（加賀美・小松, 2013)、参加者の要望や自主性が尊重されているからこそ生じる変化だと考えられる。

４．国際教育交流シンポジウムが大学キャンパスの多文化共生推進に果たす役割

国際教育交流シンポジウムは参加者にとって、卒業後の多様な文化背景を持つ人々との関係構築にも役立っていると考えられる。2012 年度の国際教育交流シンポジウムでは、開催 10 周年を記念し、卒業生から後輩学生への激励のメッセージがビデオ上映され、報告書（第 10 回）にも TEA の 1 期生、2 期生の 2 名の卒業生からのメッセージが寄せられた。この報告書において 1 期生 A は、在学時に体験した異文化間交流の楽しさや障壁に触れながら、卒業後も異文化背景を持つ友人との交流が継続されていることを述べている。今後詳細を調査する必要はあるが、グローバル化が著しい日本社会において国際教育交流シンポジウムにおける豊かな異文化間交流の経験が、多くの卒業生たちの地域社会や職場などにおける多様な人々との交流や異文化理解の原点になっていると考えられる。つまり、国際教育交流シンポジウムは大学コミュニティのみではなく日本社会の多文化共生化を推進する人材育成の場にもなっており、今後もこうした場を大学キャンパスにおいて保障することは共生社会の実現に向け、重要であろう。

註

1) 同一の学生が複数回参加している場合を含む。これまで、中国、韓国、台湾、オーストラリア、イギリス、ロシア、タイ、ニュージーランド、フランス、ポーランド、ベトナム、トルコ、カンボジア、エジプト、ドイツ、イタリア、ベルギー、チェコ、フィンランド、ノルウェー、セルビアモンテネグロ、クロアチア、リトアニア、オランダの計 26 か国の留学生が参加している。
2) 国際交流グループ TEA（Transcultural Exchange Association）は、留学生と日本人学生の交流を目的とし 2002 年にお茶の水女子大学グローバル教育センター（旧留学生センター）で設立された団体である（加賀美, 2006)。国際教育交流シンポジウムの準備については、担当教員やグローバル教育センターの支援のもと、国際交流グループ TEA のメンバーの学生が合宿実行委員となり行われている。その他の活動については、国際教育交流シンポジウムに加え、新入留学生のためのウェルカムパーティー、文化祭の模擬店出店、日々のランチトークなどがあり、学内外において自発的な交流活動が行われている。

独立行政法人日本学生支援機構 Copyright © JASSO. All rights reserved.

参考文献

石原翠（2005）「留学生と日本人学生の交流について-TEA の活動を通して-」平成 17 年度お茶の水女子大学卒業論文

加賀美常美代（2006）「教育的介入は多文化理解態度にどのように効果があるか-シミュレーション・ゲームと協働的活動の場合-」『異文化間教育』24,76-91，異文化間教育学会

加賀美常美代・小松翠（2013）　「第 12 章　大学キャンパスにおける共生」加賀美常美代編『多文化共生論-多様性理解のためのヒントとレッスン-』265-289，明石出版，東京

川喜田二郎（1986）『KJ 法 渾沌をして語らしめる』中央公論社，東京

小松翠（2013）「国際交流グループ TEA の活動は異文化間の友人形成にどのような影響を与えるか」『コミュニティ心理学研究』17（1）,67-71，日本コミュニティ心理学会

小松翠（2015a）「留学生と日本人学生の友人形成に至る交流体験はどのようなものか-多文化交流合宿 3 か月後のインタビューから-」『人文科学研究』No11，165-177

小松翠（2015b）「中国人留学生の友人関係期待と体験の否定的認識および友人形成に向けた教育的介入」平成 27 年度お茶の水女子大学博士学位論文

付記）本事例紹介はこれまで国際教育交流シンポジウムを主催し、実施してきたお茶の水女子大学グローバル教育センターとお茶の水女子大学基幹研究院加賀美常美代教授に承諾をいただき、執筆いたしました。関係者の皆様からご高配を賜り、心より御礼申し上げます。

独立行政法人日本学生支援機構 Copyright © JASSO. All rights reserved.